ISSN 0386-4790
第22号　国文学研究資料館報　昭和59年3月

国文学研究資料館報
第22号
昭和59年3月

海外資料調査 ―旧三井文庫本―

長谷川　強

京都大学の日野龍夫氏の御協力を得て、渡辺守邦・伊井春樹と私と四人で、昨秋カリフォルニア大学のバークレイ校所蔵旧三井文庫本の調査を五十八年度科学研究費（海外学術調査）により行なった。九月十三日出発、十月六日までバークレイに滞在して調査、七日にワシントンに移り、議会図書館を訪問、館蔵和古書の概要を把握、十二日にはニューヨークに移って市立図書館を訪い、十月十五日帰国という日程であったが、本稿では今回の主目的としたバークレイにおける調査を主に報告してみたい。

出発前に渡辺が主となって、旧三井文庫を知る人に聞き、またバークレイ本を披見された諸氏の報告など情報を集め、図書館からは当面調査目的とする本のカードのコピーを送付願い検討する等の準備を行ったのであるが、それらの情報では知り得なかった新知見を得ることが出来たのは、今回の調査の大きい収穫であった。

まずそれらの本は未整理の状態で一室に入れられているとのことであり、そのカードではほぼ二千八百点八千冊前後と見られ、譲渡されたと伝えられている冊数約十万と大きい差のあるのが不審であり、書名をざっと見た限りでは癖のある集書ではあるが、貴重書扱いをするような目玉になる本が少いという感じを持った。この量質二面の疑問を持って出発したが、日曜を除く九時から五時までびっしり作業して、なお時間の少いのを痛感するほど問題は四方八方に派生し、関心をひき起される多くの本に出あう充実した調査になったのであった。

結果からいうと右カードの書物は旧三井文庫のほんの一部であった。今関天彭旧蔵の漢籍（タイプの目録あり）、朝鮮本（浅見文庫―浅見倫太郎旧蔵、英文印刷目録あり）、法帖拓本類（拓本は未整理のものあり）、地図（世界図、日本図、江戸・京・大坂図、地方国分図、社寺図、交通図などの特殊図を類別、延宝より大正に及ぶほぼ二千点前後、カードあり）がそれぞれ一まとめにして置かれ、その他の版本（旧鶚軒・本居文庫本あり）、活版本は図書館（デュラントホール）・生物学図書館書庫に一般の活版本や他ルートから入った版本にまじってそれぞれの分類下に納められ、またリッチモンドの倉庫にまとめて置かれているものがある。この他美術倶楽部の入札目録がまとまって入っている。正確な冊数は把握出来なかったが、それらの集計が伝えられている冊数にほぼ当るのであろうと思う。右の漢籍より地図に至る別置分を除いた本は図書館のカードによる検索・出納は可能である。カードは題名第一字の漢字の画によって排列されており、書庫に入ると活版の紳士録と『国花万葉記』が並んでいたり、我々とちがった意識の下に整理されているから、一応全蔵書についての点検を必要とする。それに他ルートより入った和古書を含めると短期間での調査は不可能であるが、とにかく質量ともに注目すべき集書であることがわかり、旧三井文庫の全貌・現状を知り得たことは今回の調査の大きい収穫であった。

写本の調査・整理が第一の仕事であるので、版本については長谷川・渡辺で毎土曜日に書庫で原本

―目　次―

海外資料調査―旧三井文庫本―　長谷川　強……1
逸翁美術館蔵国文学関係資料　伊井　春樹……3
第三十一回国際アジア・北アフリカ人文科学会議……池田　亜……4
第七回国際日本文学研究集会……7
大英図書館の謎々の本……岡　雅彦……8
文献資料部事業報告……福田　秀一……10
研究情報部事業報告……棚町　知弥……11
整理閲覧部事業報告……本田　康雄……12
共同研究……棚町　知弥……13
利用者へのお知らせ……15
昭和五十九年度春季学会開催一覧……16

調査をし、地図は調査期間末の数日に長谷川が一覧したが、何れも時間的な制約により何分の一かの点数を披見するにとどまった。旧三井本以外のものを含めて目に付いたものを摘記すると、『太平記』古活字、慶長十五年春枝版、『可笑記』絵入、万治二年山本五兵衛版、『蔫録』その他が朝鮮本と同室に別置されており、書庫三階には、仮名草子に『三国物語』(七冊、寛文七年吉野屋惣兵衛)『姿なさけくらへ』(延宝九年、瀬尾源兵衛・本田次兵衛)『京童』(明暦四年、平野屋佐兵衛)の他『丙辰紀行』(後印本)『たか身のうえ』『似我蜂物語』『大倭二十四孝』『御伽婢子』『女郎花物語』『女仁義物語』『三井寺物語』上下巻等、西鶴本は『本朝桜陰比事』万屋・柏原刊後印本、『胸算用』序年月・刊記年月を削る万屋彦太郎印本、『織留』正徳二年印本があり、その他の浮世草子には『玉櫛笥』『東海道敵討』後印本『世間子息気質』菱屋印本『立身銀野蔓』『諸道聴耳世間猿』河内屋八兵衛印本『渡辺秘鑑』(渡辺千秋旧蔵)等、読本・黄表紙・合巻・滑稽本・人情本も多く、『西山物語』『雨月物語』(河内屋源七郎他)『里見八犬伝』(明治刷、渡辺千秋旧蔵)『椿説弓張月』『風流志道軒伝』『八笑人』『膝栗毛』、黄表紙は後期のもの十五点と明治刷三十点、合巻は殆どが幕末期のもの、その他名所図会が地域別に五十点前後もあろう。『国花万葉記』は元禄版後刷と貼紙のある本(末二冊欠)と天保六年版の揃いがある。リッチモンドの本は『狗波利子』(嘉永四年印)『多満寸太礼』『農民太平記』『立身大福帳』『渡世伝授車』『廻国一夜宿』『拾遺御伽ほうこ』(宝永八年)『新鑑草』(寛政四年)『俊徳丸一代記』『商人軍配記』『日本鹿子』(後印享保頃)『諸国旅雀』(享保五年)等を見た。地図は世界図は『万国総界図』(石川流舟、宝永五)、日本図は『日本図鑑綱目』(石川流宣、元禄三)、江戸図は『新板江戸大絵図』(延宝四年)、京都図は『増補新撰京大絵図』(元禄)大坂図は『増補新撰大坂大絵図』(貞享三)等がそれぞれの地域分け中の古いものである。

あと当面我々が調査の目標とした写本についてであるが、前述のようにカードがあり、書物は一応棚にきちんと置かれてはあったが、カードにより自由に出納出来る状態ではなかったので、あらかじめ出発前に全カードに通し番号を付けて作製したリストと現物を照合し、これもあらかじめ用意した通し番号を打った短冊を現物にはさみ、その時にカード記載事項に不備な点があったら右のリストの上で訂正し、その本の書誌や内容にわたり参考事を記録、カードがあって現物のないもの、現物はあるがカードのないものの処理をも行って、右の番号順に棚に納めるという手順で作業を進めた。あらかじめ用意し航空便で送ったリストが大幅に延着した上に、カードにとられた書名の不適切なもの、一部の書が巻序を乱しばらばらに置かれているもの、書跡類など一括されてはいるが箇々について点検の及んでいないものなど現物との照合から難渋したが、何とか予定期間内に作業を終ることが出来た。

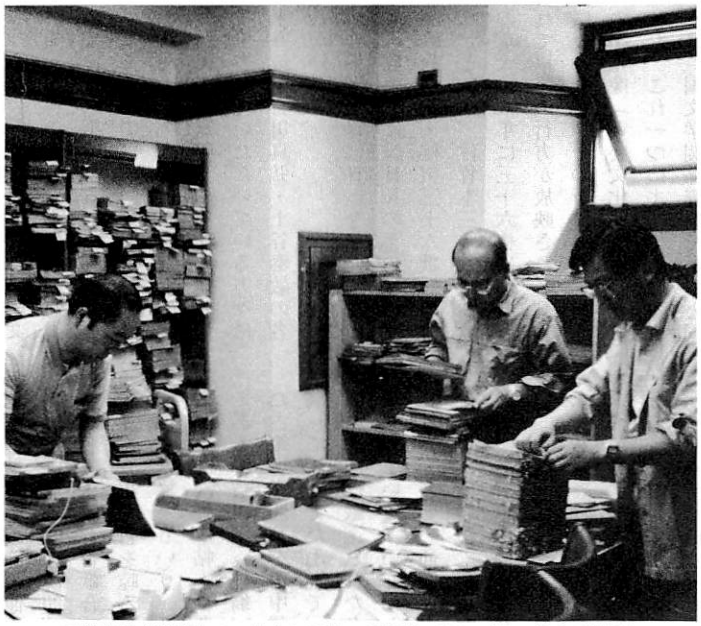
これらの書目は時間的な制約があったのと、カードが書名第一字による漢字の画で配列されており、その順序をただちに改めることの不都合といった事情から体裁上の不備はあるが、当方の『調査研究報告』第五号に掲載の予定であり、またその主要なものについては鈴木・安井・杉谷氏「アメリカ合衆国訪書目録」(語文四十一輯)、前田金五郎氏「在外江戸文学」(専修国文三〇号)、日野龍夫氏「カリフォルニア大学バークレー分校蔵明和雑録紹介」(混沌六号)等があるのでそれに譲るが、日本国内で存在の知られぬ本もあり、文学史の大道ばかり歩かずに、ちょっと傍道に目を付ける人には面白い本、珍重すべき資料もあるようである。これらの書物は資料館でも次第に収集のルートに乗せて行く計画であり、右に書き落したが三井文庫の渡米時の事情なども知り得たところを右記『研究報告』に略記する予定であり、関心を持たれる向きは御注意ありたい。

以上今回の調査に当り、カリフォルニア大学当局、殊にウイリアム・マッカラー教授、ドナルド・シャイブリー館長、図書館の由谷英二・石松久幸氏をはじめとする職員の方々、作業を手伝って下さった坂内泰子・ロジャー・シャーマン氏他の方々の御配慮・御協力に感謝申上げる。また四人のうちの最年長の者として一言付記すると、右のような作業がはかどった理由の一つとして、学内の宿舎に滞在し(この宿舎についての御配慮がなければ今回の調査は資金面

で第一歩からつまずいたと思うが）図書館との間を往復する日々で、私のような言葉の不自由な者がおり、資金も乏しく行動範囲が限られたこと、四人揃っていてもマージャンも出来ず（ルールを知らぬ私如きがおり）という状態で、一方四人とも本の好きなことに自らだまされもして、作業に力を尽すより仕方がなかったということがあろう。事情を知るものとして三人の方々の労を記しとどめておきたい。

バークレーも異常気候とかで、ツツジ・タンポポと朝顔が咲ききそい、構内には上半身裸の学生の姿も見られた。その熱気を運んだのは我々であるような噂もあったらしい。関東地方大雪の日、窓外を眺めつつ三箇月前をなつかしんで記す。

（文献資料部教授）



三井文庫本調査中の、右から伊井、長谷川、渡辺（日野龍夫氏撮影）

逸翁美術館蔵国文学関係資料

伊井　春樹

〝逸翁〟とは、阪急電鉄の社長となり、また宝塚歌劇・百貨店ほかの阪急グループを育成し、昭和二十年には国務大臣・戦災復興院総裁ともなった小林一三翁の号である。昭和三十二年一月に八十四歳で亡くなるまで、財界人として活躍する一方では、茶人・文化人としても広く知られ、その関連として生涯に収集した古美術品は五千点余にも及ぶ。翁の遺志を継ぎそれらを一般に公開する目的で昭和三十二年十月に設立されたのが現在の逸翁美術館で、旧邸邪俗山荘がそのまま陳列館として用いられている。

収蔵品は茶道具を中心としながらも、西欧の陶磁器・屏風・書画・書蹟など、多彩な内容である。重要文化財・重要美術品の指定物だけでも三十数点を数えるのだからその質の高さが知られよう。そのことはとりもなおさず、古美術品の収集に長年心血を注いでこられた、小林逸翁のすぐれた鑑識眼となみなみならぬ努力にもよる。

逸翁美術館は、その名の示す通り美術館であるだけに、国文学関係の資料は蕪村や呉春の屏風・画讃・短冊類を除けば、それほど一般に知れわたってはいない。そこで当館の数人と外部の人の協力を得てプロジェクト・チームを編成し、昭和五十五年・五十六年度に科学研究費補助金（一般B）の交付を受け、古筆切・古写本・奈良絵本・絵巻等の調査を手がけた。その成果の一端は「逸翁美術館蔵国文学関係資料解題」（国文学研究資料館文献資料部「調査研究報告」第三号、昭和五十七年三月）として、一三〇点余の書目を取りあげ、簡略な書誌とともに、一部は翻字も付した報告書をまとめた。しかし、この中には逸翁美術館収蔵品のもっとも特色をなす俳諧関係は入っておらず、ほかにも国文学関係書（美術品と相即するが）という立場からすれば、まだ多くの漏れがある。そのような事情もあって、五十七年度からは当館の共同研究のテーマに逸翁美術館を

取りあげ、トータルとしての国文学関係資料の調査および解題を進めている次第である。これまで従事してきたのは、当館では私のほか新藤協三・高田信敬、外部では今西実・清登典子、それに別の形で協力していただいている方々に米谷巌・石川真弘・土谷泰敏の各氏がいる。

昨年十一月三日（今年の一月にも再放映）にNHKのテレビで、「絵巻切断・秘宝三十六歌仙の流転」という、佐竹本三十六歌仙絵の、大正八年に三十六枚に切断されて以降の行方が放映されて評判になったが、その折に逸翁美術館の高光像（重要文化財）も紹介された。これ一つによっても分るように、国文学関係資料であると同時に美術品でもあり、収蔵されるいずれもがこのように粒ぞろいの質なのである。以下その主な資料について、私の関心のあるものをいくつか示しておきたい。

古筆切の資料は約五十点、伝貫之筆部類名家集切（深養父集）、伝行成筆和泉式部集切・石山切二点（伊勢集）、といった私家集、関戸本古今集切・伝定頼筆烏丸切（後撰集）、伝源実朝筆中院切（後拾遺集）の勅撰集、その他香紙切（麗花集）、戊辰切（和漢朗詠集）、姫路切（源氏狭衣百番歌合）など、いずれも貴重で目を瞠るものがある。それらの粋ともいうべき存在が、古筆手鑑『谷水帖』（重要文化財）である。益田孝（鈍翁）が所蔵した古筆切二四葉を田中親美翁に委嘱して仕立てた手鑑で、それだけにすべては厳選された名物切で成り立っている。いくつかを示すと高野切・筋切・通切・本阿弥切の古今集、小島切（斎宮女御集）、紙撚切（道済集）、それに基俊の多賀切（和漢朗詠集）、俊成の日野切（千載集）などである。

書蹟では、『和漢朗詠集』七点、そのうち五点には行成・世尊寺伊房・世尊寺行能などとする伝称筆者名が付される。鎌倉期の古写本もあり、書入れ注記など注目すべき伝本も存する。古今集は、伝為家筆・伝下冷泉持為筆・伝堯憲筆とする三点、ほかに伝上冷泉為頼筆伊勢物語・同為孝筆秋篠月清集さらに源氏狭衣歌合・風雅集・春夢草など、冊子本の数は少ないが、いずれもすぐれた書写本である。奈良絵本には伊勢物語・落窪物語・ふしみときは、絵巻はまた多く、大江山絵巻・熊野御本地絵巻・天狗草紙絵巻・雛牡丹姫物語絵巻・あしびき絵巻・露殿物語絵巻などが目につく。

数量のはるかに多い近世関係は、蕪村筆『奥の細道画巻』（二巻）など、これまた貴重な資料が多いが、ここではすべて省略する。これをみても、国文学関係資料を多く持った、注目すべき美術館と知られる。このように調査させていただいたのも、故人となったが岡田利兵衛元館長や、主事小野幸吉氏の御好意によるところが大である。あらためて御礼を申しあげたい。

（文献資料部助教授）

第三十一回国際アジア・北アフリカ人文科学会議、第十部会（文学の伝統と変容）

――特に日本文学分科会について――

池田　重

一

表題の国際会議（略称国際東洋学会議）は昨年八月三十一日、東京国立劇場における開会式に始まり、九月七日、京都国際会館の閉会式で終了した。日本では始めて開かれたこの国際会議は、一八七三年パリで開かれて以来、数年置きに世界各国のアジア研究の盛んな都市で開催され、今回はその百周年に当っていた。

本来この第三十一回会議はテヘランで開催される予定であったがイランの政情不安により急遽日本で開催されることになり、日本学術会議がこれを引受け、東方学会、日本中国学会、日本印度学仏教学会、日本オリエント学会が協同主催団体として運営に当ることになった。

今回の日本での開催に当って以前と異った点は、従来この会議が地域別、国別の分科会に分れていたのを、テーマ別による分科会にしたことであった。これは、今日のアジア研究が狭い地域別領域を出て、アジア又はアフリカという広汎な地域における学際的研究がもとめられていることと関連する。

次に第十部会（文学の伝統と変容）がこの会議に占める位置を示すために、全体のプログラムの概

略を示しておく。

(一)　部会

第1部会　前近代における都市

第2部会　古代近東における君主制と社会・宗教的伝統

第3部会　アジア諸国における仏教およびヒンドウ文化の伝播と受容

第4部会　東アジア・東南アジアにおいて儒教と道教が果した役割と影響

第5部会　イスラム宗教運動

第6部会　アルタイ諸民族の歴史文化・言語

第7部会　東西の文化的・経済的交流―海上ルートと陸上ルート

第8部会　南海貿易における貴金属と貨幣

第9部会　科学とテクノロジーの伝統

第10部会　文学の伝統と変容（日本、中国、印度、その他アジア・アフリカ諸国）

第11部会　美術における文献と作品との関連

第12部会　音楽・舞踊・演劇の伝統と文化交流

第13部会　法と政治において知識人の担った役割

第14部会　経済発展と文化摩擦

第15部会　アジア・アフリカ研究における経済学の役割

第16部会　東・東南アジア諸民族における言語・文化の形成

第17部会　東南アジアにおける民族歴史学およびアイデンティティに関する諸問題

第18部会　社会変化と宗教

第19部会　アジア・アフリカにおける政治過程の演劇性

(二)　セミナー

A―1　考古学における年代測定法

A―2　近年における考古研究と新出土物

A―3　甲骨・金文ならびに簡牘研究

A―4　敦煌・トルファン研究

A―5　南および東南アジア刻文字

A―6　アジア・アフリカ研究におけるコンピューター利用

B―1　神信仰（神道）

B―2　武士

(三)　コロキュアム（資料・出版および内外学術機関に関する情報の交換）

第十部会は分科会として、1日本文学、2中国文学、3印度文学、4西・東南アジア諸国文学の四部門に分れているが、ここには、日本文学に関連のあるプログラムを紹介する。

九月一日　第十部会全体会議

開会の辞　市古貞次（コンビーナー）　基調報告(総論)。報告者安部公房（議長　E・サイデンステッカー、通訳　西山千）日本文学基調報告。報告者　長谷川泉（議長　池田重、通訳　中井義幸）

九月二日～三日　日本文学分科会

1、議長　J・J・オリガス、池田重

ジェームス・バーダマン、川端康成「山の音」における植物と花

ミコライ・メラノビッチ、日本文学における伝統―谷崎潤一郎、川端康成と若い世代

松井朔子、「明暗」に対する谷崎潤一郎の批評について

2、議長　アラン・ターニー、松井朔子

栗栖美知子、明治の日本におけるジョージ・エリオット

ツベタナ・クリステバ、日本の日記、随筆と西欧の自叙伝、随筆の伝統

（ヨハナ・フイシャー、ヨーロッパから見た日本児童文学の特色）（病気欠席）

3、議長　福田秀一、井上英明

ユーコ・ブルネ、「豊饒の海」と「浜松中納言物語」

チャールス・クウィン、源氏物語におけるテンス・アスペクト・コーヒージョン

小山あつ子、蜻蛉日記編集の事情

4、議長　M・メラノビッチ、条川光樹

エックハルト・マイ、為永春水と日本近代小説の伝統

ハワード・ヒベット、江戸小説の構造変化をもたらした触媒としてのユーモア

萩原龍夫、絵解きと人生における階段

九月七日　日中比較文学分科会

議長　バートン・ワトソン、福田秀一

藤井省三、魯迅と夏目漱石―アンドロエフの影響

川口久雄、日本における漢文学の伝統と変容

芳賀　徹、東アジアの文学、芸術における桃花源記

吉田とよ子、風流―中国および

日本の詩歌における美的概念

なお第十部会は、第十二部会（音楽・舞踊・演劇の伝統と文化交流）との協同分科会として、第十二部会の第五分科会（「能と狂言」、議長、リチャード・マツキノン）を持つことになった。そして次のような報告があった。

アレクシス・ボルブース、「東北」におけるクセの構造

高山茂、翁についての一考察―初期の形態「とうとうたらり」

アンドリュウ・ツバキ、能面と印度仮面劇の仮面との比較

ジェイソン・ルソス、能とギリシャ悲劇の類似性

アジト・クマール・ゴシュ、ベンガルにおける近代演劇運動

レオン・ゾルブロッド、能「敦盛」の原型と主題

三

日本文学分科会の報告の内容については一々ふれるだけの紙面がないので、報告全体に関することを主にしたい。

まずテーマが「文学の伝統と変容」となったことについては、このテーマの下でアジア諸国の共通した問題点なり、相互の交流、影響関係なりがクローズアップされはしないかという期待が最初にあったからである。その意味では日中比較文学分科会、および第十・第十二合同部会（能と狂言）が本来の第十部会の趣旨に沿ったものなのであった。発表申込みの段階では日本の短詩型文学（俳句）のアジアにおける受容の問題が取り上げられ、国際交流の観点から注目されたのだが、発表者の参加がなかったのは残念であった。

全体会議での総論的基調報告は、安部公房が、いずれの国、民族の文学伝統は認めながらも、だからこそ現代作家の立場としてはむしろ伝統を否定する方向に立つことが今日の世界の文学創造の方向であることを説いたものであった。日本文学分科会の基調報告（長谷川泉）は、地域的に孤立した立場にありながら諸外国の異質の文化を積極的に移入同化した日本文化、文学の伝統は、それ故の特質と反面の弱点を併せ持ったことを論じたものであった。

分科会の各報告の中では谷崎潤一郎や川端康成がやはり興味と研究の対象になっており、小説の背景にある自然や日本文学の伝統をそれなりに手堅く論じたものもあった。また、日本と西欧の日記、随筆等を比較した報告は、それぞれの歴史、伝統の中で形成されたが故に、そのようなジャンルのもつ意味を国際的視野から考えねばならぬことを説いたものであった。江戸の小説を扱った報告では、一つは為永春水の人情本が明治の自然主義の小説と驚くほど類似している点を指摘したもの、他の一つは、江戸時代のユーモアが、発想や文体ばかりでなく挿絵などを含め、さまざまな形をとって文学の世界に入り込み、そこに江戸時代の文学に多様な変化をもたらしたことを論じたものであった。この他の報告もそれぞれ意義ある発表ではあったが、文学の伝統と変容というテーマから少し外れたものもないわけではなかった。

なお、国際会議としてその公用語は英語と仏語に指定されていたが、日本文学分科会の冒頭、議長提案により日本語を使用することの賛同を得て討議がすすめられた。しかし、日本文学の場合は日本の研究者の参加が多いことを考え、報告も日本語で行われるべきだという意見も提起された。

最後に、会議の報告以外に、九

月二日の午後は日本文学分科会出席者が国文学研究資料館を見学に訪れた。そして、特に国文学文献のオンライン検索と、市古貞次前館長による奈良絵本の実物による解説は参加者に深い感銘を与えたようであった。また小山弘志館長の司会による懇談会では、各国の日本文学研究機関の紹介と情報の交換が行われ、有意義な集りとなったことは特記されてよい。

× × × × × ×

以上は第十部会の日本文学分科会を中心にしたあらましの報告であるが、三年間にわたる準備と、二億三千万円の費用をかけ、日本人と外国人の研究者それぞれほぼ千名の参加を得た国際会議が終り、現在、そのプロシーディングの作成がすゝめられている。次の第三十二回会議は一九八六年、ハンブルグで開催される予定である。

（第三十一回国際東洋学会議実行委員、千葉大学教授）

第七回国際日本文学研究集会

山中　光一

前号の事業報告にも記したように、国際日本文学研究集会委員会は、今回から臼田甚五郎委員長のもとに芳賀徹委員を加えて企画が進められた。

今回はちょうど昭和五十八年八月三十一日から九月十日まで日本学術会議等の主催する大規模な国際アジア北アフリカ人文学会議（ISHAAN）が東京と京都で開催されるので（別項参照）当館の研究集会を例年通り十一月に開催するかどうかも含めて検討された。審議の結果、本集会もかなり定着しつつあるので、やはり十一月に例年通り二日間（前回は十周年記念事業の意味もあって、特に四日間に拡大して実施した。）行うこととして発表募集を行った。

結果は従来を上回る数の応募があり、従来は、たまたま国内に滞在されていた方々の応募が多かったのであるが、今回は海外からの応募も増加した。しかし、八月二十日の委員会で研究発表を予定した八名の内、二名の方がその後それぞれの事情で来日できないこととなり、プログラムを変更せざるを得なくなった。また集会間近になってさらに一名の方が渡航できない事情となったので、やむなく研究発表者五名で実施せざるを得なかった。国際研究集会であるから、できるだけ海外からの参加者も多い方が望ましいことではあるが、経費の点でも、それぞれの本務との関係からも、海外からの参加実現への障害も少くない実情なので、少しでも参加し易いように一層工夫をすることが今後の課題であると思われる。

研究集会の内容は下記会議録に詳しいが概要を記せば次のとおりである。

一月十一日（金）午後一時から参加者登録を行なった。総数六十九名、内海外からの参加者十七名でいずれも例年よりやゝ少なかった。

第一日目　館長のあいさつに続いて、伊井春樹座長のもとで『源氏物語』に関する二つの発表が行なわれ、根来氏の『源氏物語』は

国際日本文学研究集会会議録（第七回）

日次

あいさつ　小山弘志
研究発表
王朝散文の凝集性
—時制とアスペクトを中心に—　Charles J. Quinn
源氏物語における虚構の方法　根来　司
挿詩文の系譜
—日本文学史試論—　古田島洋介
今出川晴季伝
—豊臣・徳川政権交替期を生きた一人物—　松原一義
戦争と詩
—与謝野晶子から山之口貘まで—　Steve Rabson
公開講演
十八世紀諷刺文学の韓日対比考察
—朴趾源と平賀源内を中心に—　金　一根
自伝—東と西—　佐伯　彰一
記録
日程
参加者名簿
国際日本文学研究集会委員名簿

分身の法による「なさけ」の文学であるということをめぐって活発な討論が行なわれた。

館の利用案内、論文の機械検索等の公開実演などで休憩時間に少しゆっくり時間を取ったあと、D・キーン座長のもとでの第三セッションでは古田島氏の挿詩文という新しい概念の導入による日本文学史の試みについての発表が行なわれ、これまた活発な討論が行われた。翌日の松原、ラブソン両氏の発表についてもそうであるが、止むを得ない事情で発表者が少くなった反面、時間にゆとりが生じたので、発表や討論に例年より多くの時間をとることができ、それは又それでメリットがあったと思われる。

第一日五時からは二階ホールで恒例のレセプションが行なわれた。

二日目午前の松原、ラブソン両氏による詳しい資料を付した研究発表の後、午後は比較文学的な二つの公開講演が行われた。

建国大学校の金一根氏は専門は韓国文学であるが、今年国際交流基金のフェローとして来日され、韓国の朴趾源と平賀源内を中心に十八世紀の韓日諷刺文学の比較研究をされていた、そこで講演をお願いしたところ金氏は、同大学学部長相当職に就任することになったため急拠帰国されることになった。しかし何んとか無理をお願いして、この研究集会のためにわざわざ再来日していただいた。金氏は日本や韓国にも十八世紀すでに近代精神の芽があったことを指摘され、佐伯氏も従来西洋の専有物の如く考えられていた自伝伝統が日本にも古くから一貫してあった点をみごとに示され、世界の中で日本文学を考えることについて改めて参加者、聴衆に感銘を与えた。

（情報室）

大英図書館の謎々の本

岡　雅彦

謎は隠語なり言葉かくして心をさっするを謎といふされば花の日雪の夜むかし〳〵あったとさといはんより童の知恵をはからんには謎にしくはなしと今新に撰て逐一に絵抄に交へ初春の恵方土産になしぬ

新収資料紹介㉑

あたごの本地

ナ7—13　一冊

寛文頃刊の古浄瑠璃。六段本。書誌は次の通り。表紙、改装。藤色無地。寸法、縦一九・五×横一三・九糎。匡郭、四周単辺。縦一六・二×横一二・二糎。外題、「宝永板あたごせうぐん地蔵本地」と表紙左に打ち付け墨書。内題、「地蔵之御本地」。所属、大夫名等なし。刊記、終丁裏の本文末に「右大夫直正本也」とある。その下半分が空白となっており、あるいは板元名が削り取られたか。丁数、一二丁。行数、一七行。一行字数、四十五字前後。板心、上下黒魚尾。上方に「地蔵」とあり、下方に丁付がある。挿絵、六頁分（見開き三図）。一ウ—二オ、五ウ—六オ、十一ウ—十二オ。絵師、未詳。旧蔵、「Zizo-no-gohonji Romain 1vol 14020 Sans sign (Ex Collection Goncourt)」との蔵書票が添付されている。

古浄瑠璃「あたごの本地」の伝本は、他に東北大学図書館蔵本（寛文頃刊、平正信正本、板木屋彦右衛門板）と慶応義塾図書館本（延宝頃刊、五兵衛板）が知られている。諸本の本文の異同はほとんどない。当資料館本は東北大本と近い関係にあるが、東北大本が挿絵七図を有するのに対して、資料館本は東北大本の第一・三・七図に当たる三図しかない。しかし、東北大本の残りの四図、第二・四・五・六図に対応する資料館本の箇所を見ると、板心にことごとく接合の跡が認められ、資料館本は元来七図あった挿絵が板木の段階で四図切り取られて出版されたことが判明するのである。資料館本の挿絵の画趣は古雅・細密であり、その点で東北大本を凌ぐとも考えられよう。また、二段目以降の段表示は、飾り枠が用いられている。これは江戸板に特有のもののようで、ごく少数の例しか見出せない。

（小林　健二）

△吉野の花に角はなしなあに　○さくら丸ととく
△はり虎のとらにかねのかしら　○紙子づきん
△晴るはいつはり　○てりうそ
△あみだの女郎かい　○ぬれ仏
△一疋の脊を二所へ進上　○かたみおくり
△もろこしの腫物　○からかさ
△ひへるは陰嚢ばかり　○かんきん
△柚子が五百に梅五百　○すいせん
△天狗の水風呂は少しもにごらぬ　○まゆずみ
△こんやの新みせ　○藍のてばな
△いろはのとの字　○へちま
△牽牛織女　○ほしな
△惣領むすめのめしに毛がはへた　○あねがかうじ
△鉄漿壺　○かね入
△揖椰子のおや方　○くろぬし
△雷のたきもの　○らいかう
△秋の木の葉を鎌でかる　○もみぢがり
△紙帳　○つりばかり
△底ぬけ樽　○さかもり
△唐人の刀　○からたち
△るすの間に子息をたゝく　○いぬはりこ
△鴨一番　○にわとり
△酒にたおれ産を引た　○すぎのき
△尻きれ草履　○ぞう
△無住の比丘尼寺　○あまいぬ
△花はまだ半ぶんつぼみ　○むらさき
△おらが娘もくるか〳〵　○こまち
△行灯へむかふた十七夜の如来　○しりくらいくわんをん
△即座の鶏卵　○まにあいとりのこ
△絶食の腹　○やせおはら
△寝所にあかりなし　○とこやみ
△われらが元手はみな人のもの　○かりがね
△四月から六月迄の女ほう　○なつめ
△家かりての物あんじ　○しゃくやく
△重年して仕合のよい奉公　○いなりぶく
△大食　○すぎはら

右は大英図書館所蔵の謎の本で、書名「新板新撰謎語何」、書型一八×一二・五糎、紙数五丁、二段式謎三十六題を片面に四題、コマ画を付して収める。江戸の鱗形屋出版の草双紙である。

収める謎は言葉の単純な言い変えによるもので、解釈は簡単である。試みに二、三解釈すると、第一は、「吉野の花」から「桜」、物に角がなければ丸である。『後奈良院御撰何曽』その他の中世謎に「まろき物―すみとり」の謎の例があった。桜丸は浄瑠璃「菅原伝授手習鑑」に登場する梅王丸・松王丸の弟の桜丸のこと。第二、はり虎は宛字だが、紙製の張子の虎から「紙子」、「かしら」から「頭」、「かね」から「きん」で、防寒用の紙子頭布を導く。第三は解釈を要しない。てりうそは照蜃で蜃のオスを言うとのこと。

右のような二段式謎は日本古来の謎形式であり、有名な『後奈良院御撰謎』を始め、江戸以前の謎は全てこの形式である。江戸時代でも、例えば当館所蔵の寛文ごろの出版と推定される「謎の本」や、「竹斎はなし」「新竹斎」などに所収の謎々も二段形式で、カケ、トキ、ココロを備えた所謂三段式謎が登場するのはおよそ享保期の西川派の絵本に於てであり、三段式謎が二段式謎を完全に駆逐し去るのは文化文政期以降である。

江戸時代の謎の本は、そのほとんどが片々たる小冊子であって、今日まで伝存することは極めて少ない。従って、正確に刊年を認定することはむずかしいのだが、大英本の刊年は、安永の初めごろと思われる。「風流新撰謎尽」(五丁、国会図書館蔵)「新板なぞづくし」(五丁、架蔵)と同時期、「新板御伽なぞづくし」(十丁、都立中央図書館蔵)は若干後の刊であろうか。

今年度八月、二ヶ月間の短期在外研修で、大英図書館を訪れた時、その所蔵本の中から偶然に、アーネスト・サトーの蔵書印のある同書を手に取ることが出来た。丁度この十年ほど特に謎々の本を求めて原本や紙焼写真などを集めていたので、この本にめぐり会えたことは大変有難かった。今まで集めた一五〇点ほどの中には本書と同一のものはなく、更に、二、三点の伝存しか知られていない安永初年のものだったので、感激も一入であった。

もはや紙数も尽きたが、在外研修の二ヶ月間は大英図書館やハーバード大学などで、古版本の調査を行った。時には後陽成天皇の勅版『日本書記』やキリシタン版『落葉集』等々を暫し時を忘れてながめたり、奈良絵本『あを葉の笛』などをノートも取らずに読み耽ったりもし、貴重な一時期を過すことが出来た。海外で感じた事は沢山あるが省筆せざるを得ない。仄

聞するところでは、大英図書館の和古書目録の作成が日本の書籍学の権威の手でいよいよ着手されるとのこと。在外資料がグンと身近かなものになる。

（整理閲覧部助教授）

文献資料部事業報告

福田　秀一

昭和五十八年度も間もなく終るが、この一年は予算面では前年以上にきびしい観があったけれども、幸い各方面の御理解・御協力のもとに、ほぼ順調に事業を進めることができた。この場を借りて関係者各位にあつく御礼申上げる。

以下、主として昭和五十八年八月以降来年一月末までの主な事業につき簡略に報告する。具体的な数字や研究成果の一端などは、例によって『調査研究報告』（第五号、三月末刊行予定）に掲載の予定である。なお、同『報告』は元来当部の業務報告書であるが、それを進めるために随時国文学の専門家等の御教示をも乞うべく、第三号以降は国文学科の類を有する全国の大学の研究室には送付している（第一・二号は国文関係の大学院を有するところのみ）が、それ以外へはほとんど配布していない。部数の制約等によるもので、御諒承を乞う。

昭和五十八年度文献資料調査・収集の概況

一、調査

現年度は、本年一月末までに左の四九箇所（予備調査を含む）の所蔵資料計六四八五点を調査した。

北海道東北地区（順不同、敬称略一部略称、以下同じ）

市立弘前図書館・盛岡市中央公民館・県立秋田図書館・酒田市立光丘文庫・鶴岡市郷土資料館・市立会津図書館

関東地区

矢口文庫・彰考館・埼玉県立文書館・麗沢大学図書館・久松国男・同（当館寄託本）・東洋文庫・東京芸大附属図書館・東大国文学研究室・某個人・法政大学能楽研究所（鴻山文庫）・宮内庁書陵部・都立中央図書館（東京誌料他）

中部地区

新潟大学附属図書館（佐野文庫）・金沢大学附属図書館・金沢市立図書館（藤本文庫）・加賀市立図書館（聖藩文庫）・白山比咩神社・上田市立図書館（花月文庫）・金城学院大学図書館・（名古屋大学附属図書館（神宮皇学館文庫）・岐阜市立図書館・神宮文庫

近畿地区

彦根市立図書館（琴堂文庫）・西教寺・陽明文庫・京大文学部（頴原文庫）・大和文華館・逸翁美術館・林田良平（蝸牛廬文庫）・吉永文庫・住吉大社・大阪女子大附属図書館

中国四国地区

光藤葆光・萩市立図書館・吉川家・宇部市立図書館（新井文庫）・多和文庫・河野信一記念文化館・高知県立図書館（山内文庫）

九州地区

新田神社・熊本大学附属図書館（寄託、北岡文庫）・市立臼杵図書館

二、収集

本年一月末までに左の三一箇所の所蔵資料計五五七五点を収集（撮影）した。

北海道東北地区

県立秋田図書館・鶴岡市郷土資料館・市立会津図書館

関東地区

彰考館・麗沢大学図書館・東洋文庫（紙焼写真）・学習院大学国語国文学研究室・宮内庁書陵部・某個人・法政大学能楽研究所（鴻山文庫）・都立中央図書館（加賀文庫他）・清浄光寺

中部地区

富山県立図書館（志田文庫）・武生市立図書館・上田市立図書館（花月文庫）・新城市教育委員会（牧野文庫）・市立刈谷図書館・岐阜市立図書館・射和文庫

近畿地区

彦根市立図書館（琴堂文庫）、陽明文庫・京都女子大図書館・大和文華館・大阪女子大附属図書館

中国四国地区

高知県立図書館（山内文庫）・河野信一記念文化館

九州地区

市立臼杵図書館・多久市郷土資料館・新田神社

既製マイクロフィッシュ購入

静嘉堂文庫（物語文学書集成第三・四篇）・東大附属図書館（霞亭文庫）

海外資料の調査・収集

海外の諸機関等に所蔵される国文学資料の調査・収集は、その必要度が高いにもかかわらず予算その他の事情で思うにまかせないが、

現年度は若干の進展があった。

すなわち調査では、文部省科学研究費が認められて、カリフォルニア大学バークレイ校に蔵せられる旧三井文庫の写本約二八〇〇点の調査を行った。これには当部の教官三名（長谷川・渡辺・伊井）と京大助教授日野龍夫氏が従事し、旧三井文庫本の現状などを実地に調査することができた。

収集では、会計法規上の問題などで各国・各機関と当館との方針・条件等が一致しなかったり、撮影の速度・能率が日本と違ったりして、心ずしも大量には進んでいないが、現年度の一つの成果として、ソウル大学校図書館との交渉が進み、先方の好意的な協力で近く同館資料（旧京城帝大蔵書）をも収集（マイクロフィルム受贈）できる見通しとなったことが挙げられる。

第一―三室

各時代の国文学文献資料の調査研究をも業務とする当部第一～三室では、右のような事業の遂行の任に当る傍ら、各教官分担により逸翁美術館蔵国文学資料の解題研究（共同研究）・古筆切資料の研究・和古書表紙文様集成・蔵書印の研究などに従事している。

第四室

前号に報告したように、現年度は井上宗雄・服部幸造の両氏を客員として迎え、彰考館蔵本を中心に和歌文学および軍記・語り物文学の調査研究に従事して頂いている。

（文献資料部長）

研究情報部事業報告

棚町　知弥

要するに当部にとって、この一年は第一期十年の総仕上げ、第二期への準備の一年であった。文献目録等のオンライン検索の準備は、情報処理面については着々成果をおさめているが、「意味深い」検索を可能とする情報データの加工という厖大な労力に対する手当てが喫緊の課題である。

情報室

第七回国際日本文学研究集会は、別稿のように若干プログラムの変更があったが予定通り終了し、三月会議録を発行した。

館報の年二回の発行、国文学年鑑用の新聞情報（論文、訃報、賞等）の整理等ルーチンの仕事はそれぞれ引き続き行っているが、前号にも記したように今年度は昭和三十七年以前研究文献目録事業への協力もあって省力効率化につとめた。

編集室

『国文学年鑑』（昭和五十七年）の編集を行った。三月二十五日、至文堂より刊行。

五ヶ年計画の臨時事業『国文学研究文献目録（昭和十六年～昭和三十七年）』の作成は三月中に終了する予定である。

『国文学研究文献目録（昭和十六年～昭和三十七年）』（後出）編集のための臨時編集室の組織は、年度後半も引きつづき作業した。すなわち、当部の国文助手が全員参加して、文献目録コンピュータ編集の試行錯誤を経験した。

情報処理室は新規開発に加えて、機種更新などことに事多いこの後半期に、助教授二名の文献情報センター併任（半分勤務）は大変苦しい状況であったが、なんとか大きな遅れも病人も出さずにやっと乗りきれそうというところである。

原則として対象を館蔵の雑誌にしぼり採集されたデータの総件数は、約四万四千件にのぼった、今回は昭和十六年以降を刊行の対象とするため、収集されるデータは約三万六千件ほどになると思われる。昭和十五年以前の分については、差し当っては、久松潜一編『国語国文学年鑑』（昭和十三～十五年）や浪速高等学校編『国語国文研究雑誌索引』（昭和六年以前を対象）などの労作が存在するので、しばらくこれらに譲り、当館所蔵雑誌の充実に伴い新たに独自の目録の作成に取り組みたい。なお、言うまでもないが、昭和三八年以降については、東京大学国語国文学会編『国語国文学研究文献目録』（昭和三八～四五）及び国文学研究資料館編『国文学研究文献目録』（昭和四六～）――途中から『国文学年鑑』と改称――がある。

情報処理室

新電子計算機システムの導入とソフトウェアシステムの移行作業を行った（館報21号参照）。漢字プリンタの移行により、版下原版の基本サイズをA4からB4とした。

新システムにおける端末の館内配布のため、個人利用者という類

を設け、ニューズレター「KOKINニュース」の発行を開始し、利用者講習会（10月2回）、利用者懇談会（1月）など開催した。利用者からの要望・質問へは、マンパワーの故に対応しきれないでいる。端末利用の通信用内線と電子計算機室内に通話用内線を各一回線を館内から移設した。

今年度の研究開発は、「古典籍総合目録作成システム」の蓄積部開発とファイル群の統合設計、共同研究「連歌」システムの設計と入力部開発、「三十七年以前研究論文目録作成システム」の追加改良の他、「論文検索システム」のDBローディング手順の開発を行った。

定常的業務である「オンライン資料管理システム」、『マイクロ資料目録』、『和古書目録』、『逐次刊行物目録』などの入力処理、版下作成処理などに加えて、今年から「古典籍総合目録システム」の入力作業が本格化した。これはデータ件数が万の単位で入力されるものである。外字登録の作業規約と手順について検討している。今年度は古典籍ならびに著者名典拠を除き百余字の外字を作成する。

科学研究費による研究は、「国文学情報検索システムの共同利用に関する研究」(試験研究(2)代表者小山弘志）が今年度完了、「データ処理システムの為の漢字シソーラスの研究開発」(特定研究〝言語の標準化〟代表者田嶋一夫）が、さらに一年継続する。

定常的業務に対する業務体制の整備の必要性を、くり返し指摘してきたが、教官併任その他の事情により、業務体制の不備が露呈し、各部業務計画に大規模な変調を及ぼし、業務利用者に多大の迷惑をかけている。年度末処理スケジュールの回復に努力している。利用者の危機感は非常に大きく、情報処理室として責任を痛感している。

新計算機導入に関連して、館内各部から貴重な協力を得たこと、館内における利用要求に大きな変動の生じつつあることを付記する。

（研究情報部長）

整理閲覧部事業報告

本田　康雄

資料の収集、受入、整理、保存及び利用サービス、並びに公開講演会の開催、展示等の定常的業務は順調に進展した。

この事業報告欄でも毎回報告しているように、開館以来閲覧、複写等の利用者は急増しており、不充分ながらも、当館が資料センターとして広く研究者、大学院生、学生等に利用されるようになってきた。ところで、マイクロフィルムその他の資料の充実と共に今後ともこの傾向が続くと思われるが、一方、平行して利用サービスのための業務も急激に増加しているので、現在のサービスレベルを今後維持・拡大していくためには業務体制等も含めた業務全体の再検討をすべき時期に近づきつつある。

(一)整理閲覧室

以下に各業務毎に報告する。

(1)受入業務

五八年十二月末における今年度の資料受入数は、マイクロ資料（オリジナルフィルムの数）七一三リール、図書一、九二九冊、逐次刊行物四、一八五巻号冊であった。

また、東京大学文献情報センターにおいて現在編集中である学術雑誌総合目録（和文編）作成事業への協力を行った。

(2)古典籍総合目録作成事業

古典籍書誌データの入力システムが五七年度に完成し、今年度その入力作業手順が確立したのに伴い、書誌データのパンチ、入力作業を定常業務化した。今期は、すでに作成ずみの書誌データ（約四万件）の点検、パンチ、入力に全力をあげることとし、その作業を進めている。全ての処理を終えるにはあと一年位かかる予定である。

(3)整理業務

『マイクロ資料目録一九八三年』は、七月以降、六、〇三〇点のデータの作成・入力を終え、年度内刊行に向けて、校正、編集作業を行っている。総収録点数は約九、〇〇〇点である。平行して、累積データの点検も順調に進んでいる。

『和古書目録増加2（一九八三）』の方もデータ入力を完了し、校正、編集作業に取りかかっており、年度内に刊行される。今回の収録書目数は一七三点である。

その他、帙作成、補修は例年通り行い、新刊書の整理も定常的に進めている。

なお、七月と十二月に開かれた貴重書指定小委員会において、「都

忠介公奏疏』、『歌林良材集・竹園抄』、『嵯峨のかよひ路』の三点があらたに貴重書の指定を受けた。

(4)閲覧業務

昭和五八年下半期（七月～一二月）は、入室者数が五、〇九九人（一日平均三六人）、文献複写が九、六三二件（一日平均六七件）、相互利用の申込受付が五二二件で、いずれも前年に比べて大きく上回った。利用者増加の傾向は、いぜんとして続いている。利用者の増加は、当館にとって喜ばしいことであるが、その反面、サービスの低下という問題が生じつつある。

このように年々増加する利用者とその要求に対応すべく、七月には、閲覧室の逐次刊行物の全冊開架コーナーの増設、一二月には、閲覧室の放送設備の設置、リーダープリンターの高性能機種への更新を行うなど、サービス体制の整備、改善に努めた。

(5)マイクロ室業務

ケンブリッジ大学図書館他八文庫一一九リールの作業用ネガフィルムを作成した。閲覧用ポジフィルムは、一五文庫七〇四リールを作製し、陽明文庫、東京大学総合図書館等の焼付けを行い、一四八九冊の紙焼写真本を作製した。文献複写サービスの撮影二二点、ポジフィルム作製三五点を行った。

(二)参考室

日常業務として、参考質問の受付・回答に従事し、参考図書の充実と参考開架閲覧室の維持にあたった。

なお、参考開架閲覧室の開架資料について、請求番号から排架位置を知るための検索リストを備えつけた。

国文学の普及業務として、次のとおり公開講演会・展示を開催した。

●第6回夏期公開講演会「日記と文学」（7月21日～23日、於当館。講演集刊行予定）

21日　「記録と国文学」井上宗雄（立教大学教授・本年度当館客員教授）、「王朝期の日記（摂関全盛期の日記）」村井康彦（京都女子大学教授）。

22日　「院政期の日記」目崎徳衛（聖心女子大学教授）、「王朝から中世へ」栃木孝惟（千葉大学教授）。

23日　「天皇の日常と思索―花園院宸記―」岩佐美代子（鶴見大学助教授）、「咄の生いたち―多聞院日記・大乗院寺社雑事記―」徳江元正（国学院大学教授）。

●第19回公開講演会（10月22日、於仙台市・読売ホール）

「狩野文庫と狩野亨吉」原田隆吉（東北大学助教授）、「『奥の細道』をめぐって」金沢規雄（宮城教育大学教授）。金沢先生には、当初予定していた尾形仂先生が急病のため、代わって講演していただいた。

●第13回特別展示「中世歌論書展―久松家寄託資料―」（11月1日～15日。『国文学研究資料館特別展示目録8』を刊行）

●常設展示

第20回「史書と日記―古代・中世―」（7月4日～9月29日）

第21回「近世前期の文学」（10月11日～24日および11月18日～12月26日）

（整理閲覧部長）

共同研究

以下の各項目に述べる三つの共同研究を実施しつつあるが、昭和五十九年度もそれぞれ継続するなどが二月二十七日の共同研究委員会で合意された。

(1)逸翁美術館蔵国文学関係資料の研究

逸翁美術館蔵国文学関係資料については本号別項で紹介しているが、その俳諧関係の調査を進めている。当初は今年度中に調査を終る予定であったが、共同研究員の海外出張などもあったので、五十九年度も調査を続ける予定である。

(2)連歌資料のコンピュータ処理の研究

要するに、連衆名などに省略のない連歌作品年表をコンピュータにデータベース化し、ソフトな（会話型）索引をつくることが可能かという試作研究。三年計画の二年目後半の今期は、システム設計のサンプル・データの対象とした国会連歌合集のカード化（約一、一〇〇例）がほぼ完了、同じく館蔵連歌資料のカード化が約七割方進行といったところである。

情報処理室には本プロジェクトの当初よりフォーマットの作成などに参画を受けていたが、今期はいよいよシステム設計ならびに入力部プログラム開発の段階に入った。すなわち、連歌プロバーのメンバーを代表して奥田共同研究員

棚町　知弥

と棚町と、安永助教授を中心としての情報処理チームとの間で、月二回以上のシステム分析の打合せなどを重ね、その過程でカード執筆要領にも幾度もの改訂を加えた。年末より一部はパンチ作業に入り、年度内には校正作業もはじまる予定。

右のため、共同研究員の打合せならびに作業の集合が五回目まで行われた。

(3)日本文学における「向う側」の研究

本共同研究テーマの中心であった鶴田欣也客員教授は九月一四日任期を終り、ブリティッシュ・コロンビア大学へ帰られたが、共同研究は継続し、研究会の討議をふまえて、それぞれ三月末日までに各自の論文をまとめ、五十九年度前半に仕上げの研究会で討議を行って共同研究の成果として出版する予定である。

（共同研究委員会委員長）

外国人研究員

ツルタ・キンヤ

現職　ブリティッシュコロンビア大学教授

研究題目　日本文学における「向う側」の発想

期間　昭和58年4月15日～昭和58年9月14日（5ヵ月）

外国出張

昭和58年度科学研究費補助金（海外学術調査）

長谷川　強（研究代表者）

渡辺守邦

伊井春樹

日野龍夫（京都大学文学部）

研究題目　カリフォルニア大学（バークレイ）所蔵国文学文献資料の総合調査―国際協力による在外国文学文献の総合的研究―

期間　昭和58年9月13日～58年10月15日

昭和58年度国際研究集会派遣研究員

内藤衛亮

会議名　国際オンライン情報会議

開催地　ロンドン（連合王国）

期間　昭和58年12月3日～昭和58年12月10日

文部省在外研究員

岡　雅彦

渡航先国　連合王国、アメリカ合衆国

目的　海外における日本文学資料の調査研究並びに日本文学研究情況の調査研究

期間　昭和58年8月1日～昭和58年9月30日（2ヵ月）

私学研修員

片山　亨

現職　甲南女子大学文学部教授

研究題目　新古今集古注釈の研究

期間　昭和58年4月1日～58年9月30日（6ヶ月）

標　宮子

現職　女子聖学院短期大学国文科助教授

研究題目　自照文学研究―「とはずがたり」を中心にして

期間　昭和58年4月1日～59年3月31日（1ヵ年）

評議員会議の開催について

本年度第二回評議員会議が三月十六日(金)に当館大会議室において石井議長ほか十五名の出席を得て開催され、管理運営の概況、昭和五十九年度予算内示及び昭和五十九年度事業計画について評議が行われた。

運営協議員会議の開催について

本年度第二回運営協議員会議が十一月一七日(木)に当館中会議室において、小山議長ほか十二名の出席を得て開催され、教官人事及び運営の概況について協議が行われた。

本年度第三回運営協議員会議が、十二月十九日(月)に当館中会議室において、小山議長ほか十三名の出席を得て開催され、教官人事について協議が行われた。

本年度第四回運営協議員会議が二月二十八日(火)に当館中会議室において、小山議長ほか十二名の出席を得て開催され、教官人事、管理運営の概況、昭和五十九年度予算内示及び昭和五十九年度事業計画について協議が行われた。

委員会日誌

昭和58年

10月19日　文献目録委員会(第二回)

11月11日　国際日本文学研究集会委員会（第四回）

12月16日　国文学文献資料収集計画委員会（第二回）

昭和59年

1月19日　情報検索委員会(第二回)

2月27日　共同研究委員会（第二回）

3月15日　古典籍総合目録委員会（第一回）

3月23日　文献目録委員会（第三回）

利用者へのお知らせ

◆所蔵目録刊行の御案内

当館では毎年、資料別にマイクロ資料・和古書・逐次刊行物の目録を刊行しておりますが、このたびそれらの最新版が刊行されましたので御案内いたします。

(1)『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九八三年』(第七冊)

この目録には、二五所蔵者（文庫）分、九、〇〇八点が収録されています。そのうち一五所蔵者（文庫）が、今回初めて収録されるものです。今回の収録分には、黄表紙・洒落本や俳諧のまとまったコレクションも含まれています。収録所蔵者（文庫）は次のとおりです。

文庫No.	所蔵者
2	東京大学総合図書館
20	宮内庁書陵部
25	東京都立中央図書館
30	刈谷市立刈谷図書館（村上文庫）
32	水府明徳会彰考館
33	東洋文庫
51	大阪市立大学附属図書館（森文庫）
55	陽明文庫
81	佐賀県立図書館
88	東京芸術大学附属図書館
89	名古屋市鶴舞中央図書館
96	八戸市立図書館
98	岐阜大学附属図書館
209	富山県立図書館（志田文庫）
211	都城市立図書館
212	宮崎県総合博物館
イ5	弥谷寺
オ3	押方重信
ク2	黒木忍
サ1	桜井健太郎
シ2	鹽竈神社博物館
ス2	杉田正臣
ナ2	中村幸彦
ヤ5	山上嘉修
ヤ6	山上嘉久

(2)『国文学研究資料館蔵和古書目録増加2（一九八三）』

この目録は、昨年三月刊行の『和古書目録増加1（一九八二）』に続く、増加分の第二冊目です。昨年一年間に収集した和古書（写本・版本）一七三点が収録されています。当館の和古書の検索については、『和古書目録一九七二―一九八一』『同増加1（一九八二）』と今回刊行の『同増加2（一九八三）』の三冊をご覧ください。

(3)『国文学研究資料館蔵逐次刊行物目録一九八四年』

収録誌数は、前年分より一六四誌増え、二、七三八タイトルで、昨年十一月末までの受入れ分が収録されています。それ以降の受入れ分については、カウンターで係員におたずねください。

◆東奥義塾図書館のサービス区分について

これまで青森県の東奥義塾図書館のマイクロ資料のサービス区分は「X」（未回答のためEに準じ館内閲覧のみ）でしたが、このたび東奥義塾図書館より正式に御回答をいただき、サービス区分「E」と決まりました。したがって、複写サービスは、できないことが確定いたしました。なお、これに該当する東奥義塾図書館の資料は、『マイクロ資料目録一九七九年』（第三冊）に収録されています。

◆新指定貴重書

このたび次の二点が新たに貴重書に指定されました。これによって当館の貴重書は計六十一点となりました。

・『歌林良材集・竹園抄』（写）
・『嵯峨のかよひ路』（写）

◆マイクロ資料目録の市販について

『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九八二年』（第六冊）の縮刷版が笠間書院より刊行され市販されています（定価七、〇〇〇円）。既刊五冊とあわせて御利用ください。

◆複写申込についてのお願い―来館の利用者へ

・〆切時間間際は、たいへん混雑しますので、申込みはできるだけ早めにお願いします。
・〆切時間間際および混雑時は、複写の受付を制限することがありますので、あらかじめ御了承ください。
・閉室時間（午後四時三十分）までに複写が終らない場合は、翌日渡しとなることもあります。

なお、複写の受付時間は、平日が午後四時まで、土曜日が午前十一時までとなっております。

昭和五十九年度春季学会開催一覧

情報室

国語国文学会連絡協議会に参加する学会の春季大会予定は次のとおりである。学会掲出は五十音順。以下①事務局、②大会開催日、③会場。②③の記入のない学会は大会予定無しか、または大会期日未定。

解釈学会　①〒一七〇豊島区北大塚三―二九―二教育出版センター内

近代語学会　①〒一六〇新宿区北新宿三―一〇―一〇―五〇七

国語学会　①〒一〇一千代田区神田錦町三―一一武蔵野書院気付②五月一九～二〇日③東京虎ノ門ホール（一九日）、東京学芸大学（二〇日）

古事記学会　①〒一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学日本文化研究所第六研究室内②六月二三～二四日③駒沢大学

古代文学会　①〒二一一川崎市高津区千年三〇五吉田修作方

上代文学会　①〒二三〇横浜市鶴見区鶴見一―一―三鶴見大学女子短期大学部国文科研究室内②六月一六～一九日③小樽商科大学

説話文学会　①〒一七〇豊島区西巣鴨三―二〇―一大正大学文学部国文学研究室内②六月二四日③大正大学

全国大学国語国文学会　①〒一〇二千代田区三番町二八―六グラン三番町四〇五号桜楓社気付②六月二～三日③慶応義塾大学（三田）

中古文学会　①〒四六三名古屋市守山区大森二二八二―二金城学院大学国文学（松田）研究室内②五月二六～二七日③梢山女学園大学

中世文学会　①〒一〇二千代田区富士見二―一七―一法政大学能楽研究所内②五月一九～二〇日③法政大学

日本演劇学会　①〒一六〇新宿区西早稲田一―六―一早稲田大学演劇博物館内②五月一九日③桐朋学園大学短大部

日本歌謡学会　①〒一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部第五研究室内②五月一九～二〇日③明治大学（和泉校舎）

日本近世文学会　①〒一〇一千代田区神田神保町三―二七共立女子大学日本文学研究室内②六月二三～二四日③共立女子大学（神田校舎）

日本近代文学会　①〒一一二文京区目白台二―八―一日本女子大学文学部国文学科研究室内②五月二六～二七日③日本女子大学

日本口承文芸学会　①〒一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部第五研究室内②六月二～三日③別府大学

日本文学協会　①〒一七〇豊島区東池袋二―一九―二第二八千代マンション二〇二号

日本文学風土学会　①〒二一四川崎市多摩区東三田二―一―一専修大学文学部国文学研究室内②五月下旬③専修大学神田校舎

日本文芸研究会　①〒九八〇仙台市川内東北大学文学部内

俳文学会　①〒一五七世田谷区成城六―一―二〇成城大学文芸学部尾形研究室内

表現学会　①〒四八〇―一一愛知県愛知郡長久手町愛知淑徳大学国文学科研究室内②五月一九～二〇日③大阪市立労働会館

仏教文学会　①〒一八三世田谷区駒沢一―二三駒沢大学文学部国文学研究室内（東部）〒六〇三京都市北区紫野北花ノ坊町九六仏教大学高橋貞一研究室内（西部）②六月一六～一七日③仏教大学

万葉学会　①〒五六五吹田市千里山東三関西大学国文学研究室内

美夫君志会　①〒四六六名古屋市昭和区八事本町一〇一中京大学文学部国文学研究室内

和歌文学会　①〒一七一豊島区西池袋三―三四立教大学文学部日本文学研究室内

館報入手ご希望の方は

郵便番号、あて先、氏名を明記のうえ、郵送料（切手）を同封して当館情報室あてお申し込み下さい。

国文学研究資料館報　第二十二号
昭和五十九年三月発行
編集・発行者
国文学研究資料館
東京都品川区豊町一―一六―一〇
郵便番号一四二
電話（七八五）七一三一（代）
印刷所　株式会社　三興